

特別例会

2016年3月7日

報告者 前田裕子

論題 : 日本の“生産技術”はこうして生まれた  
～戦時期航空エンジン生産の展開～

報告要旨 :

後世から振り返る日本の戦時生産は、時に矛盾や無策の塊にさえ見える。軍需に特化し、跛行的に肥大化した航空機工業は、その象徴的存在ともいえよう。だが、航空機、とりわけ航空エンジンの量産において、いわゆる“生産技術”（＝戦後高度経済成長を支えた製造業〈*esp.* 加工組立型産業）の生産技術に繋がり、その本質は現代にも通用するもの、として理解する）が急速かつ飛躍的に発展したことは興味深い事実である。それは当時、最上級の精密機械工業製品であった航空エンジンの増産が、資材の不足やサポーティング産業の低位にもかかわらず国家的に至上命題になった状況において、“生産技術”そのものが否応なく焦眉の課題となったがゆえに生じた、皮肉な現象でもあった。当時の関係者の意図がどうであれ、日本が敗戦して航空機工業そのものが消滅した後になお残るべきものとして、生産技術上の工夫と経験が、そこでは積み重ねられた。その過程には、近代産業の礎ともいえる機械工業の本質がよく顕れている。

本報告では、三菱重工航空エンジン部門が経験した“生産技術”の発進および展開の過程を中心に、戦前・戦時期航空機工業の概要、さらにはアメリカの航空エンジン工場との比較などを織り交ぜて検討する。